

疝痛予防を考えたカイバ管理とは

門別診療所 青木 栞

草刈り作業で忙しい時期になりました。青草がよく伸び、過食による疝痛が起りやすい時期です。今回は、疝痛リスクを下げるという観点からカイバ管理を中心にお話しさせていただきます。

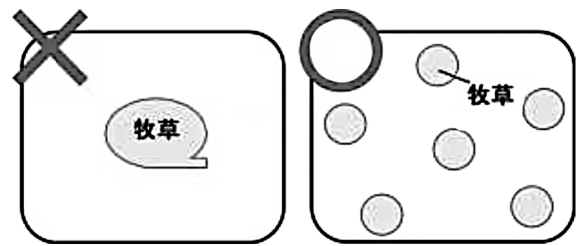
今時期は、定期的に放牧地の草刈りを行うとともに、急激な放牧時間の延長は避け、食べ過ぎを防ぎましょう。基本的に放牧地で栄養豊富な青草を摂取しているので、濃厚飼料の量は減らします。腸鼓張や腸捻転のリスクを下げるためにも、収牧直後にカイバを付けるのは避けたほうが良いでしょう。

○濃厚飼料はできるだけ時間をかけて、少しずつ食べさせましょう。頻回に分けて一回あたりを少量（多くても1~2kgまで）にし、切り草を混ぜるとよいです。胃潰瘍予防にもなります。カロリー摂取量を増やしたい時には、大麦が穀類の中では比較的異常発酵を起こす成分が少なく、消化もされやすくなります。また、植物油をやるのも良いでしょう（480ml未満を1日2回まで）。

○牧草も含め、カイバの種類・量・質の変更は徐々に行いましょう。変更には2週間以上かけ、新しい飼料は全体の1/10量未満から始めるのが理想です。緩やかな飼料変更を行うことで腸内細菌が適応し、消化不良や異常発酵を起こしにくくなります。

○放牧地に牧草を置く場合には、ウマが移動しながら摂食するように、ほぐした牧草の山

を離して置くようにしましょう（図を参照）。ロールを置くなど、一か所で大量に摂食できる環境は過食を起こしやすいです。特に茎の多い細かいタイプの乾草は十分に咀嚼されず塊で飲み込んでしまいやすいので、注意が必要です。乾草は上質な緑の葉が多いものが理想です。



牧草は離して数か所に！

○青草のシーズンが過ぎても、疝痛防止の工夫を怠らないで！

春と秋の牧草は、夏の牧草に比べて異常発酵や消化不良を起こしやすい傾向があります。牧草中の栄養成分は一日の中でも変化し、晴れの日の午後遅くや、寒い夜が続く晴れの日の早朝も同様の傾向が見られます。春・秋に疝痛を起こしやすいようであれば、天候により集放牧時間の短縮を検討してみてくださいもありません。

牧草が伸び止まる時期の粗飼料は、乾草がメインになります。寒冷期にはさらに水分摂取量が不足しやすくなります。便秘による疝痛を防ぐため、ボロの量が固くなる・減る等の変化が見られたら、塩を多めに混ぜたりダボ飼いにしたり水を飲ませる工夫をしましょう。

馬づくりにおいてカイバの管理は常に重要な課題であると思います。日々の管理に生かしていただければ幸いです。